# SAMSON AGONISTES の潜在的要素について

植　木　敏　一

## I

サムソン劇のなかで，盲目の英雄サムソンは，彼の全作品中で用いられた唯一の人物であり，ミルトンが聖書に出てくるこの偉大な人物を主人公として用いようとした意図は，キリスト教徒のために何か書かねばならないという考え，また主題を旧約聖書の神話に限定したいという考え，また劇形式としてはギリシヤ劇が最高の文学形体だという考えが彼の心のなかにあった。

たしかに，劇の構想は青年時代に彼の心に温めれていたと推測することができ，彼は劇の中心としてサムソンをもってきたことは成功であり，彼の全作品中のどの作品のなかにも用いず，最後の作品に用いたという点においてこの劇の重要性があるといわなければならない。ミルトンは，若い時代に *Comus* を書いたが，この劇は *Samson Agonistes* と比較すれば不完全な仮面劇のなかに自己と見物人を欺ばすということと，コウマスによって寓意化された肉欲と，姫によって寓意化された徳との間の争斗という着想によって，ミルトンの倫理観を確立しようとする試みを企てたが，全面的な成功をおさめたとは言い得ない点がある。

ところが，*Samson* は劇としての形式をとるという決心をしたが，この点が晩年のミルトンの大胆不敵な精神から出発している。というのは，劇曲はいかなる形式とはいえども清教徒の最も嫌悪すべきものであった。そういうわけで，彼としても舞台にかける意志は全然なかったわけで，聖書のなかのサムソンを中心人物とすれば，清教徒の抵抗を少しでもかわせられ得ると考えたからであろう。*Comus* と比較してみれば，たしかに筋を簡易化し，省略すべきところは省略し，文学的純化に力点をおき「静」と「動」とを巧みに組み合せていることが知りえるであろう。

ところで，ミルトンはこの劇においてなにを考えていたであろうか。これは我々としては知りえるのである。つまり，時と場所と演技の外的部分を強力に一致させていることや，異教徒に捕われ，自由を奪われたサムソンが，「動く墓場」という人間としては最大の絶望をかなぐり捨てて，生ける神—ミルトンの神観は，詩としては *Paradise Lost* から発展してこの時点においては，現代的神観に全く合致しているのだが—を信じて行動し，彼自身の内面的な葛藤を表示している。たとえば，私の最も感銘の深い開幕の台詞の第一声において，サムソンは自分自身以外にはなにも信じることのできないほどの絶望の淵に立って，自分の運命を託っている。この静なるうちに，はげしい絶望的な絶叫が劇の中心部にまで，大きな変転もなく続いてゆき，*Comus* のようなアレゴリ的な特色を失ってしまい，人間の象徴にきわめてよく似る前に，言いすぎであるかもしれないが，この憂鬱な劇においては，サムソンが斗争を終ろうとする最後の決心を失い，自分自身を，神を，宇

宙の中心とする宇宙の広大なる空間の中におしこめてしまう。次の

The dungeon of thyself ; thy soul

(Which men enjoying sight oft without cause complain)

Imprisoned now indeed,

In real darkness of the body dwell, (156―9)

において，魂を閉じこめるというのは，現代の読者も反対しないであろう。

ところが，サムソン劇について20世紀になって論争が起ったのはいろいろあろうけれども，大別すると，作者ミルトンと彼の書いた劇の主人公サムソンとの間の盲目という身体的障害と環境におけるいろいろの類似点，次には劇の成立にいたるまでの出所，劇の構造，劇の精神，劇の意義などに集中しているのである。これらが再評価，再々評価という多数の論文となって，英米を始めとして世界の英文学界において夥しく発表されてきたし，いまなお後続しているのである。

サムソン劇を読めば確かに自叙伝的要素を多分に含んでいるが，ただ単にミルトンの自叙伝と考えれば，この劇は芸術的意義がなくなるであろう。この点が解釈上非常に困難を感ぜしめるところであって，彼の生涯の一部であるということは否定できないであろう。つまり，彼が心に描いた理想社会はクロムウェル父子による護官政治（1653―59）の成立が可能になるであろうという確証をつかんで完全に打ち砕かれたし，1651―62年の冬において彼の視力は全く喪失し，加えて身体の衰弱が甚だしくなり，革命つまり新しい政体の確立を夢みて，その実現に陰の援助をなしてきたが，スチュアート家の王位復古は彼の長い間期待していた清教徒による理想の共和国の建設に対しての絶望感を深めた。また1660年の頃に，ミルトンは短期間ではあったが，投獄されたという精神的衝撃などが彼の生涯における精神上重々しい負荷となっておったことは事実である。こういった史料が，この劇と生涯の出来事との密着感を深めているのである。再び繰り返すが，部分的には類似性はあるとしても，全面的ではなく、それと劇の構造と芸術的想像力とが二重像的合致現象を呈したと考えてみたいのである。

なぜこの劇が自叙伝的であると長い間言われてきたかといえば，マッソン教授の著書，論文が影響を大いに与えたからであろう。もちろん，サムソンにはミルトンの反映はあるが，批評的系列としては18世紀の John Upton 教授の批評的見解の拡大解釈であり，ミルトンの苦斗にみちた生活の隠喩であり風喩であると考え，特にミルトンの不幸な最初の結婚の結果だということに重点をおいたが，Warburton 教授ほどには，悪妻への風刺にまで押し進めなかったところにマッソン教授への救いがあった。

Stoll 教授によれば *Samson Agonistes* は，

'… the great Puritan poems of sin and righteousness, end, each in its own way, on a quiet note of reconciliation with'[1] といいまた，*Samson Agonistes* を *Comus*, *Paradise Lost*, *Paradise Regained* とともに一括して，'There is, as one of the school has admirably shown, the same central situation. It is that of temptation. What could be more Puritan ? What less Greek ? What less Greek ? In all four it is not a question of temperance, moderation, or the golden mean at all'.[2] と考えた。彼の所説から分析すると *Samson Agonistes* は *Comus* や *Lycidas* と比較すれば苦行とか，禁欲的な面が多分にあり，清教徒的色彩が濃厚になってきている。

私は，この劇作品をどういうように取り扱うべきか。直接劇の人物にふれてミルトンの

核心をついてみようと思う。

## II

まず開幕すると——この形式内容では観る劇ではなく，読む劇と見なすべきだが——ガザの牢獄に繋がれ，盲目にされてしまったサムソンは戸外に出てくる。

A little onward lend thy guiding hand
To these dark steps, a little further on,
For yonder bank hath choice of seed or shade. (1—4)

という科白は，「私はいと高き神の摂理の意志を非難してはならぬ。」という「静」なる心理的状態ではあるが，これから進展しようとする劇の進行になんらかの期待と不気味な雰囲気のなかに読者をおくのである。「静」であるといっても，Joseph H. Summers[3] によれば，*Paradise Lost* や *Paradise Regained* は人類の救いで終っているが，*Samson Agonistes* においては，両者の型とは無関係ではないが，主たる「動」も十分には描き出されていない。この劇詩の始めは，すでにすべてのものを失った，堕落世界の人物の登場である。このサムソンにとっては，問題は心の周囲および内に存在する完成をとどめたり発見することでもなく，将来の可能性と神の摂理を目によって信じることでもない。サムソンは失われた力と目的感をとり戻さなければならない。また英雄的な運命——勝利と死——を完成してしまわなければならない。遠い将来というのではなく数時間のうちにおいてである。

この後に，民衆あるいは時代的な背景が出てくるが，この悲劇——彼は特にギリシヤ悲劇を踏襲したのだが——においては，前述の通りに些細な要素となっている。サムソンは群衆の喧噪から退いて自己を考え，過去の自己と現在の自己の相違に思いをめぐらし，盲目の現在の自己に人びとの詐欺，軽蔑，罵詈，虐待が加えられている。ことに，彼の悲痛な心理的内面が露呈してくる。太陽に光あれども自分には光なく，まさしく彼自身が彼の墓であり，また動く墓場だと自分の運命に対する苦悩を託したのである。

God, when he gave me strength, to show withal
How slight the gift was, hung it in my hair.
But peace! I must quarrel with the will
Of highest dispensation, which herein
Happ'ly had ends abvoe my reach to know: (58—62)

のなかにおいて，始めて神の問題にふれようとしているのである。神観については，「キリスト教教義」のなかでも述べている。神観にふれる前にエリザベス朝以来の清教徒について一言したいのである。たしかに，時代の進展とともに清教徒が団体として勢力を漸次拡大してきたことは明かである。宗教改革によって聖書があらゆる階級のなかにはいってゆき，それが英国人の教養となったことも事実である。したがって，英国人は神の前では階級をとわず，貧富をとわず，平等であり，また聖書[4] の言葉によって自らを考える権利を持ったということを知り，宗教についての疑義に関しての論義に烈しい情熱を傾けることができた。清教徒の家庭では聖書が読まれ，家長は説教する牧師の代理をもつとめた。また，彼等の大いなる理想は肉よりも霊の権勢という信念であった。このような傾向は，ミルトンの行動のなかにも認められるのである。また，清教徒のなかには，偽善，狂信，厳格，非寛容が悪い性質として表面に頭を出し，ビショップ制度よりもっと悪い専制を英

国にうちたてようとした英国の民衆からミルトンは訣別してしまった。クロムウェルは，軍隊の力をかりて清教徒の反対する政治を行ったが，結果的には清教徒の頑迷固陋を平静という軌道にのせたのである。

さて，再び神観について続けたいのであるが，ミルトン哲学体系の一部の起原はキリストの神性を否認したアリウス派の教義とみなされる。簡単にいえば，神とは無限，無形，了知されざるものと考えるのである。ミルトンは，あまりにも神を求め過ぎたために，教会そのものが不必要だとさへ考え，これに関連して攻撃する行動にも出たし，教会の牧師を余りにも尊敬はしていなかったようである。さすがミルトンは，ビショップに対しての反対ははげしかったけれども，英国の王制には反対しなかった。ミルトンは *The Christian Doctrine* のなかで再びつぎのように言っている。

> Again : the existence of God is further proved
> by that feeling, whether we term it conscience,
> or right reason, which even in the worst of
> characters, is not altogether extinguished.
> If there were no God, there would be no
> distinction between right and wrong. (5)

また，

> God is known, so far as he is pleased to make us acquainted with himself,
> either from his own nature, or from his efficient power. (6)

彼の神はこの *The Chrisitian Doctrine* に到達するまでは彼の神の観念にも変遷があった。早くも，*Comus* において，コウマスの科白（11. 706—36）を分析してみると，ミルトン哲学における神観が大きな役目を演ずる思考が生れてくる。簡単にいえば，自然は結局神によって創造されたものである。それに，自然の本能は善である。従って，自然の本能に従うことは神の意志を実行することになる。ところで，

> Th'all-giver would be Unthank′t, would be Unprais′d. (l. 722)
>
> 創造主は感謝されず，讃えられないであろう

は後世の *Paradise* Lost において，

> Our maker bids increase, who bids abstain
> But our destroyer, foe to God and Man ? (Ⅳ 748—49)
>
> わが創造主は繁殖を命じ，
> 神と人の敵なる破壊者以外に誰が禁欲を命じるであろう？

へ発展していくのである。このミルトンの自然観は，彼の汎神論的思考の起原ともなっているが，この汎神論的思考も *The Christian Doctrine* に至っては，20世紀的な絶対唯一の神，近代的なキリスト教の神観に近づいていったことは，1825年 Sumner 師の翻訳によって確証されたのである。従って，ミルトンが書かんとする意図は，英雄サムソンといえども，神の前では人間の弱さを露呈せざるを得ないのである。また，この劇のなかで感じられることは，たしかに人間の弱さそのものである。

.....

Who like a foolish pilot have shipwrecked
My vessel trusted to me from above,
Gloriously rigged ; and for a word, a tear,
Fool, have divulged the secret gift of God
To a deceitful woman? Tell me friends,
Am I not sung and proverbed for a fool
In every street, do they not say, "How well
Are come upon him his deserts" ? Yet why ?
Immeasurable strength they might behold
In me, of wisdom nothing more than mean ;
This with the other should, at least, have paired ;
These two proportioned ill drove me transverse. (ll. 198—209)

これに対して，合唱隊は彼の母国にはそれに劣らず美しい貴い生れの女がいるのに，なにを好んで異教徒のペリシテの女を妻[7]としたことについて，サムソンの心の苦痛を強調するのである。サムソンは，自己いや人間の弱さについて次のように，

Of what now I suffer
Who vanquished with a peal of words (O weakness !)
Gave up my fort of silence to a woman.

自己を責めるのである。堕落した原因，即ち悪の発生が考えられるのである。悪の発生という思想は，ルネッサンス朝時代には平凡な一般人の思考であった。要言すれば，情欲が理性に打ち勝っときに，また感情が知性を盲目にし，あるいは圧倒するときに，悪が発生すると考えられたのである。一個人の場合もそうであるが，すべてのものにもあてはまるのである。ミルトンの考えによれば，彼自身の経験から学び得たものは，人類の経験ともなるし，ミルトンが深く感じた教訓は人間全体に対しても教訓となるのである。ミルトンの高い理想としては，人間には悪というものが存在してはならないというのが根本的理念である。しかし，強く感じる肉欲の力は排斥すべきものではなく，普通の本能は満足されなければならぬとしている。従って肉が心を運び去るときは，「悪」が権力をもつのである。これに反して本能が理性によって是認されるとき，その刺戟は善であって，かつ合法的であって，傾聴する価値があるとする。言葉を替えれば，真の恋愛と霊の高貴性とは分離し得ないことを力説するのである。これは，Plato の影響の甚大なことは，すでに認められているところではあるが，Irene Samuel 教授の論説を引用しておこう。

> Clearly Milton believes with Plato that the 'high mystery' of true love, which here, as in *the Apology for Smectymnuus,* is linked with the Chastity, brings happiness when understood. This belief sheds light on Milton's other uses of the Platonic teaching.[8]

さて，ミルトンの言わんとする肉と霊はどのようになるのであろうか。ある状態においては，肉は霊となり，ある時期を経ると霊と肉は合体して二つとも不滅になり，かくの如くにして両者の区別は消え去り，その区別が甚だ稀薄になる。肉体は chastity を通して霊となり，霊はそれ自身色欲によって具象化するのである。*Paradise Lost* においても同じことが言えるのだが，堕落ということは，ある意味においては色欲であり，換言すれば

「暗黒の行為」である。ミルトンは，分離した魂を信じなくなったとき，肉体は聖なるものとなった。chastity に対する讃美は結婚愛に対する讃美でもある。'Marriage is more than human, 'the covenant of God.'[9] ともなり，情欲の恐怖や堕落は不合理な愛のみと結合し，結婚をして，'Marriage, from a perilous hazard and snare, they shall reduce to be a more certain haven and retirement of happy Society' とも言わしめている。

このような情欲による堕落は感情によって救われるものではなく，理性が克服しなければならぬ。そして，人間の肉体的自由は「徳」によってのみ得られるというのである。*Comus* の次の引用とは関連性が認められる。

Love vertue, she alone is free,
She can teach ye how to clime
Higher then the Spheary chime
Or if vertue feeble were,
Heav'n it self would stoop to her.[10]

この *Comus* および *Paradise Lost* において発見されている感情が一度征服されたときには色欲に変ずる。また *Comus* において，兄をして，

And link't it self by carnal sensualty
To a degenetate and degrated state. (37—4)

といわしめているミルトンの人間についての言及は，まさしくミルトンの哲学的重要性を帯る思想でもある。ミルトンには善悪の観念が各所にあらわれているが，すでに *Comus* のなかで，善観念が現れ始めたが，それと反対に，*Lycidas* には悪観念の出現に気がつくのである[11]。ミルトンの初期の作品には *Samson Agonistes*，ほどには強い観念的な言辞を用いてはいないのである。

さて，サムソンとデリラの対話について考えると，何が「善」という形式をそなえ，何が神聖なるものであるかということである。sensual love とか lust も理性の是認によって合法ということであれば神聖であると考え，理性に反する場合は，合唱隊のいう 'unclean' であり，'unchaste'[12] である。

またサムソンが，

Then swoll'n with pride into the snare I fell
Of fair fallacious looks, venereal trains,
Softn'd with pleasure an voluptuous life;
At length to lay my head and hallow'd pledge
Of all my strength in the lascivious lap
Of a deceitful Concubine who shore me
Like a tame Weather, all my precious fleece,
Then turn'd me out ridiculous, despoil'd,
Shav'n and disarm'd among my enemies.[13]

と言って嘆くのだが，この場合にはサムソンの心とデリラの心が調和をしていない。つまり肉体の結合は堕落の状態を意味している。

これは肉体の堕落は魂の堕落であると概念づけたが，前にも述べたようにミルトンが第一回の結婚に失敗したという自叙伝的な叙述ではなく，自己の経験と，自己の想像力と哲学が二重像的合致をしたとみるべきであろう。

また，有名な「離婚論」を大別すると，(1)情欲論，(2)堕落論，(3)人間性善説の3本の柱からなっていて，(1)は肉が理性に勝った場合に離婚が生じ，(2)は感情が理性に勝った場合に離婚が生じる。sensuality こそ堕落の唯一の原因となる。(3)は人間が善の軌道から逸脱することは，神の意志に反することで，それが「善」か「悪」かの判断は理性に対してどうであるか如何ということに存するのである。ミルトンとしては，結局結婚あるいは愛は，男と女との間の知的な調和に基づかねばならぬということを言わんとするのである。

また，*Tetrachordon* において，女は男より劣るとみているが，奴隷とは考えない。旧約聖書の創世記の影響をうけて，神が男を造り給い，その次に女を造り給うたという神からの縦の一連性的創造性を認めている。そして，社会的に独立した男と女との交際は，肉体的，道徳的，知的見地からみてその必要性を説き，霊肉の完全なる結合の下に生活している男と女には，離婚はあり得ない。また色欲も存在しない。色欲も法則もないところに真の愛が存在すると考える。その愛とは，ミルトンの言葉を借りれば，'Love only is the fulfilling of every commandment, I cited no particular scripture, but spake a general sense, which might be collected from many places.' (*Colasterion*, *The Student Milton* P. 722) であって，このような法則を踏み誤るところに堕落という事実が起りうるとするのである。

なお，*Colasterion* の中で，結婚とは「喜びの神秘」と呼ばれており，離婚をおこさないとすれば，一つの条件があるという。彼は次のように言って，答えている。

> 'I answer : if he love his wife as himself, he must love
> her so far as he may preserve himself to her in a cheerful
> and comfortable manner, and not so as to ruin himself
> by anguish and sorrow, without any benefit to her.' (ibid.)

このように，男の堕落の概念が形成され，その堕落が女によっておこり，徹底的に苦しまなければならぬという考え方は，*Paradise Lost* や *Samson Agonistes* のなかに流れこんでいるが，この両者には厳密な意味においてニュアンスの相違があるが，堕落は女のためにという着想は共通しているが，*Samson Agonistes* において，

> *Chor*. All is best, though we oft doubt,
> What th′ unsearchable dispose
> Of highest wisdom brings about,
> And ever best found in the close.
> Oft he seems to hide his face,
> But unexpectedly returns
> And to his faithful Champion hath in place
> Bore witness gloriously ; whence *Gaza* mourns,
> And all that band them to resist
> His uncontroulable intent,
> His servants he with new acquist
> Of true experience from this great event
> With peace and consolation hath dismist,
> And calm of mind all passion spent.[14]

で終っているが，この合唱隊がサムソンの心のなかに，good sense と independance と

generosity の安全であることを認めたということは，サムソンが彼女の不貞を許したことにもなる。

このようにして，ミルトンの愛，結婚，離婚については，聖書的要素が多分に浸透しているが，この上にプラトン的な愛の概念が二重写しとなってミルトンの愛の観念を強固なものとしている。

さて，ミルトンがはたして，プラトン的な愛を，どの程度理解していたかについて，Samuel 教授はその概念を次の如く分類している。

1. a distinction between love and lust
2. a process that occurs in the soul
3. a creator of knowledge and virtue
4. a thing divine
5. an abstracted sublimity[15]

ただたんに，ミルトンの「霊は肉体に勝る」というプラトンの思想は，私のいう彼の文学のなかに二重像合致的性格をおびて表現はされているが，ミルトン現代解釈学としては，愛という概念がどのような心理的経過をへて，どのように高められてきたか，それは *Samson Agonistes* のなかにのみならず，他の作品のなかにも愛の崇高性への追求が今後の課題として残されており，Kurth 教授[16] が聖書的物語的詩が，discursive であろうとも，allegorical であろうとも，classical heroic であろうとも，純粋であり明瞭なものでなければならないのである。それが詩人への特別な興味をおこす出発点となるもので，ミルトンがいかに純粋な気持からこの劇へ対処していったかということも頷けるであろう。

はたして，*Samson Agonites* はただ単に聖書的伝統的な悲劇に終っているであろうか。肉体の死は罪に対する罰と考えて悲しむべき末路に終ったであろうか。劇中に登場する人びとの忠告，叱責，誘惑，嘲笑を浴びながら，自己の自尊心と絶望に対する勝利感を抱いて，あたかも煉獄にのたうっているサムソンには神の救いとか約束があるのであろうか。彼の選んだ死は勝利なのである。*Paradise Regained* においては，愛への言及はないが，誘惑に対する勝利であった如く（l. 173―5）また，*Paradise Lost* において神から「自由」の賜と幸福とを授与され，摂理を信じながら楽園を出てゆくアダムとイヴのように，読む人を心をなにか温かくする結末をおいている。英雄サムソンも愚かな行いを犯したけれども，失われた「善」をいかにして取り戻すかを神が示し給うたということでこの劇を終えていることは，またサムソンとデリラとの間に，高低起伏の感情の経過を経てこの劇を終えていることは，われわれには喜びを与えているのである。

## 参 考 文 献


1. Elmer Edgar Stoll, *Poets and Playwrights* P. 189
2. *Ibid.*, P. 213
3. Joseph H. Summers, *The Lyric and Dramatic Milton* PP. 153—4
4. *The Chritrine Doctrine, The Student's Milton* P. 921
5. *Ibid.*, P. 923
6. *Ibid.*, P. 923
7. *Doctrine and Displine of Divorce, The Student's Milton* P. 612
8. Irene Samuel, *Plato and Milton* p. p. 153—4

9. *Doctrine and Discipline of Divorce, The Student's Milton* P. 593
10. *Comus ll.* 1019—22
11. *Lycidas ll.* 119—21
12. *Samson Agonistes l.* 320
13. *Ibid., ll.* 532—40
14. *Ibid., ll.* 1745—58
15. Irene Samuel, *Plato and Milton* P. 153
16. Burton O. Kurth, *Milton and Christian Heroism* P. 21